

付章 7 田辺遺跡出土高句麗系軒丸瓦とその関連氏族

上田 瞳

はじめに

田辺遺跡から出土した軒丸瓦は、いわゆる高句麗系軒丸瓦である。最近私は河内出土の高句麗系軒丸瓦を分類し編年を試みた。また、その分布の意義についても考察を加えた。今回は前論文をふまえつつ、田辺遺跡出土の軒丸瓦（以下、田辺例とする）に焦点を当ててみたい。

河内高句麗系 IA型式軒丸瓦

志紀郡の、土師寺、衣縫廃寺、船橋廃寺で採用されている高句麗系軒丸瓦は全て同範と考え、河内高句麗系 IA型式（以下河内 IA型式と呼ぶ）と仮称した。また、田辺例も同様と考えた。

しかし、田辺例を隅々まで観察した結果、次の点から同紋異範の可能性が高くなつた。

弁端ほど花弁が高くなり、高いところで0.7cmを測る。かなり摩滅しているが、弁央には稜線が認められ、もとから弁高が低かったことが判る。弁間に珠紋を配し、弁間幅1.2cm、中房端から珠紋内側まで5cmを測る。中房径は3.7cm、弁幅3.5cm、弁長5.7cmを測る。弁端から周縁までの距離や周縁が不明のため単純に中房比で比較できないが、中房径と弁端径の比率（中弁比と呼ぶ）は24.5で、衣縫廃寺のものから弁端から周縁までの幅を復元した中房率（周縁除く）は22.3になる。それに対し土師寺例は中弁比23.9、中房率21.3でやや異なり、弁幅も土師寺例の3cm前後と比較するとかなり広い。

そこで従来の河内 IA型式を IA 1型式、田辺例を IA 2型式と細分したい。ただ、不明瞭なところも多いので一応、河内 IA型式と包括して取り扱いたい。

河内 IA 1型式は豊浦寺ⅣA型式軒丸瓦とほぼ同じ紋様であるが、瓦当径が大きく、中央にやや大きな蓮子を配し、その周りにやや小さな6個の蓮子を配することが異なる。紋様的には奥山廃寺Ⅲ Cに近い物である。断面形を観察すると、土師寺例の瓦当裏面は中央部が厚く盛り上がっている。ただし、回転台を用いたかどうかは不明である。中房率は周縁を含めたもので18前後、周縁を省くと21前後で豊浦寺Ⅳ A型式に近い。また、河内 IA 2型式は豊浦寺Ⅳ B型式に近い。

豊浦寺Ⅳ A型式を始めとするいわゆる雪組系軒瓦は最近の研究成果から、620年前後の年代を与えられている。この型式は大和では主に豊浦寺、奥山廃寺、中宮寺（平隆寺）でオリジナルが採用されている。しかし、これらはすべて同時期とは考えられない。たとえば豊浦寺Ⅳ A型式とⅢ D型式を比較すると、後者は中房率が大きく、蓮子数も少ない。このような傾向は、同時期のバリエーションと考えることもできるが、時期的変化をあらわすと考えたい。

その観点から考えると、豊浦寺Ⅳ A→奥山廃寺Ⅲ A→奥山廃寺Ⅲ C→中宮寺→豊浦寺Ⅳ D→豊浦寺Ⅵ→豊浦寺Ⅶと中房率が大きくなる傾向があり、蓮子もほぼ減少化傾向で、この順に時期が下ると考えたい。

以上のことを踏まえると河内 IA 1型式は、奥山廃寺Ⅲ C型式との比較から620年代後半から630

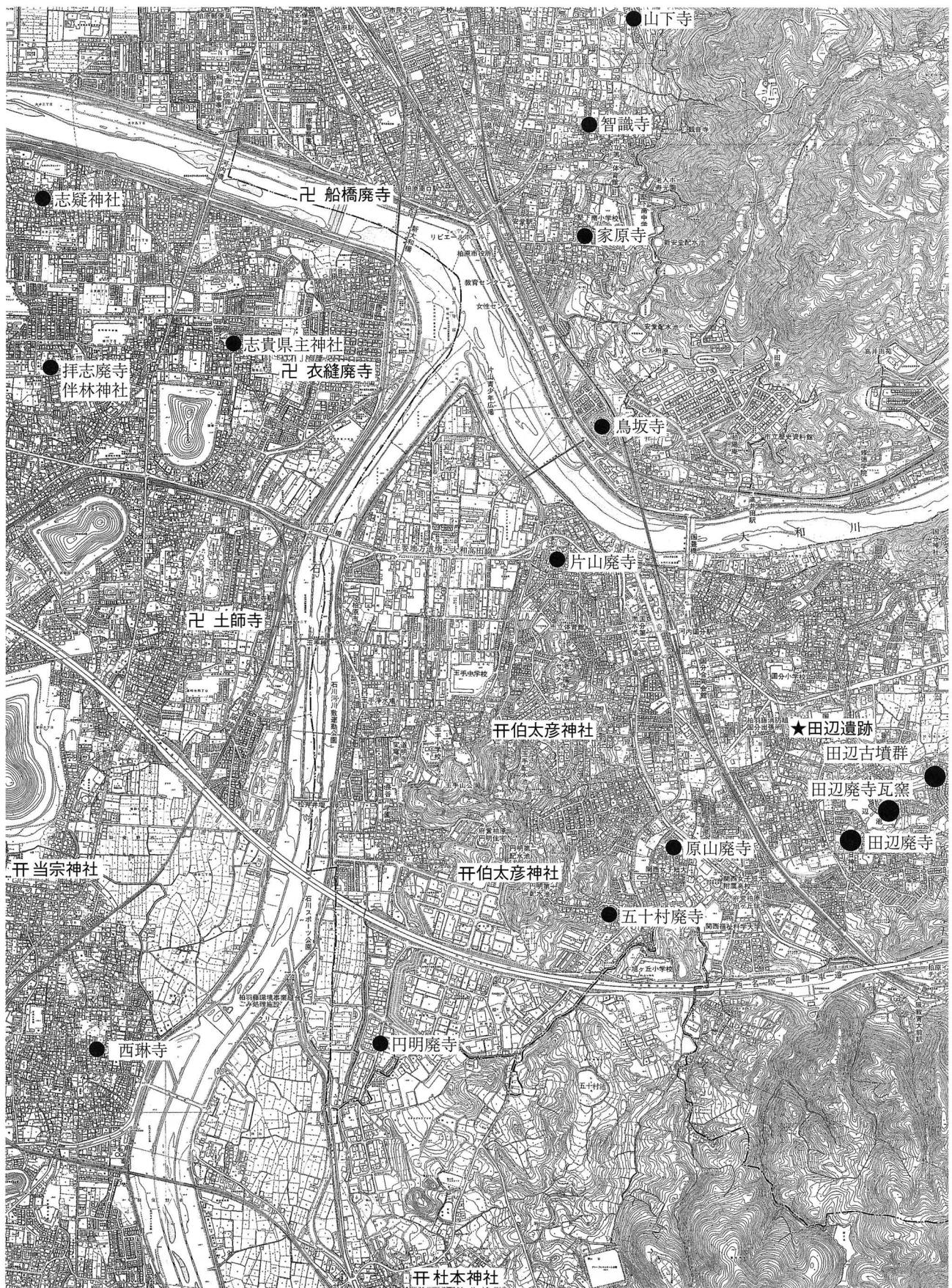


図-67 高句麗系河内 I A型式軒丸瓦出土寺院および関係社寺

年代初頭には成立したと考えられる。田辺遺跡の河内IA2型式はやや時期が下る可能性も考えられる。田辺遺跡の位置付けと河内IA型式出土の意義

軒瓦の出土した田辺遺跡は旧安宿郡資母郷にあたる。この付近は田辺氏の本拠地で氏寺である田辺廃寺、墳墓である田辺古墳・古墓群が存在する。また、田辺廃寺に関連する瓦窯も見つかっている。

田辺氏は崇神天皇皇子豊城入彦命の四世孫大荒田別命の後裔とする皇別氏族と漢王のち知惣から出たとする一族がある。なお、知惣は大県史の祖である百済人和徳の誤写で同一人とする説、吳国主照淵の孫で崇峻紀三年（590）条に出家したとみえる善智聰と同一とする説や百済辰孫王の別名智宗王のこととし、船、津、白猪（葛井）三氏と同族とする説も見受けられる。

この他、旧安宿郡資母郷には後漢光武帝七世孫慎近王後裔の中国渡来系氏族である下村主や「日本靈異記」にみられる釈智光の鋤田寺の存在から、魏陳思王の後裔氏族である鋤田連（後、上村主）、平城宮木簡から中国渡来系氏族の西漢人伯尼（禰）が安宿郡に居住していることが判る。

これら村主系氏族は西漢氏に管理統括され、さらに西漢人などを率いることが最近の研究によつて判明してきている。とくに、西漢氏は物部氏と強く結びついていたが、その滅亡後、鉄器生産工房を傘下に再編成させたと考えられる。その時、蘇我氏と結びついたのであろう。

今回軒瓦の出土した地点は田辺遺跡でも田辺廃寺の所在するところから一つ谷をはさむこと、田辺廃寺創建や田辺古墳群造営の時期より更に古い時期の土器や瓦が供伴していることなどから田辺氏との関連は薄いと考えられる。

そこで田辺氏以外で資母郷付近に盤踞している下村主、伯禰、鋤田連などが浮上してくる。これらは加藤謙吉氏の研究で、すべて西漢氏の傘下として鉄生産などの工房を営んでいた氏族であることが判る。加藤氏によると、西漢氏は天武朝の賜姓事業で最終的に忌寸の姓を獲得していることから、秦氏、西文氏、東漢氏と同じく、渡来系の名門氏族として位置づけられている。また、大和の東漢氏とならんと、村主・漢人集団を束ねた同族連合体として存在し、その中心が台忌寸、河内忌寸、山城忌寸などの中国渡来系（後漢孝獻帝後裔）白竜王系の氏族であったと提示されている。なお、当宗忌寸や広原忌寸など後漢孝獻帝後裔氏族も西漢氏の一族か関連の深い氏族であった可能性が存在することも述べられている。

以上の状況や今回の出土地点の近くに伯太彦神社と伯太姫神社が存在することから推定すると、西漢人である伯禰氏が今回の遺構に直接関わっていた可能性が高いと考える。ただ、西漢人だけでは氏族の格から考えて寺院造営は無理かと思えるので、上部組織の上村主や下村主、さらに上の西漢氏一族が関与していると考えたい。

以前の論文で、河内においては高句麗系軒丸瓦II群を採用したほとんどが、西漢氏一族の氏寺としてもしくは協力して寺院を建立していったと理解できることを指摘した。今回の出土例から高句麗系軒丸瓦I群（豊浦寺式）を採用した寺院も、西漢氏の一族が造営に関与していた可能性が指摘できるであろう。

さらに憶説を深めると、西漢氏一族の当宗忌寸の氏神である式内社当宗神社が志紀郡内に存在することから、志紀郡の高句麗系軒瓦の分布にはこの氏族が関連すると考えたい。

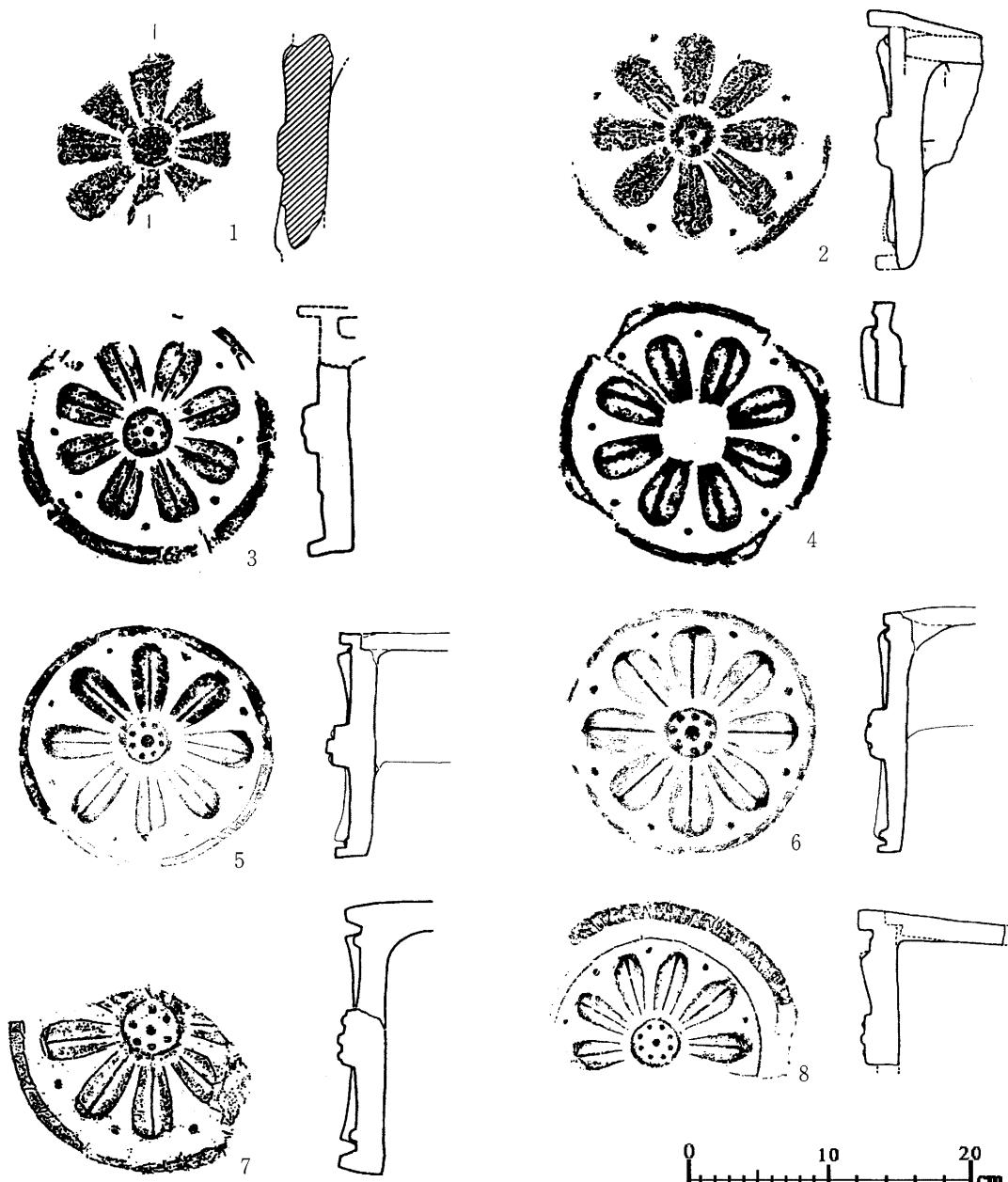
また、この安宿郡に関わったと考えられる西漢氏一族については全く根拠がないが、当宗忌寸と同族ではあるが居住地が不明の広原忌寸を当てればどうであろうか。玉手山周辺には「西原」「東原」「原山」など原つく字名が多い。これが広原忌寸の「原」に通じると考えることもできなくはないであろう。なお、杜本神社を氏神とする矢作忌寸は『新撰姓氏録』では物部の一族となっているが、後世の当宗神社とのつながりの深さや、忌寸という姓からこの氏族も西漢氏一族と考え、この氏族を当てることも可能であろう。

参考文献

加藤謙吉「西漢氏の存在形態」『古代王権と祭儀』黛弘道 編 1900

上田睦「高句麗系軒丸瓦と渡来系氏族—出土瓦から見た河内の古代寺院と氏族3」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』1999

上田睦「摂河泉の高句麗系軒丸瓦—河内を中心として—」『古代瓦研究 I』奈良国立文化財研究所 2000



1. 田辺遺跡 2. 土師寺 3. 衣縫廃寺 4. 船橋廃寺 5. 6. 豊浦寺 7. 奥山廃寺 8. 平隆寺
1～4 河内河内高句麗系A I型式 5. 豊浦寺IV A型式 6. 豊浦寺IV B型式 7. 奥山廃寺III C型式 8. 平隆寺II型式
図-68 河内と大和の豊浦寺式軒丸瓦